

〔書評〕

室山敏昭著

『生活語彙の基礎的研究』

国 広 哲 弥

一、本書の成立

本書は、中国地方に生れ育ち、今日までそこで暮らしてこられた著者が、中国地方を中心とする方言語彙についての長年の調査結果をまとめられたものである。その大部分は既発表のものであるが、今回まとめられるに当たって必要に応じて修正が加えられた。全体は理論篇である第一部と、具体篇である第二部に分かれるが、第一部には新しく識者の批判に答えるべく、第二章「生活語彙論における基礎的概念」と、既発表論文の不備を補うべく書かれた第六章「生活語彙論の方法と体系」の二章が付け加えられている。第一部の総タイトルは「生活語彙論の方法」である。第二部「生活語彙の構造」は大きく次の四つに分かれる。

- I 漁業語彙（潮の名・海岸地名・風位名・魚名）
- II 農業語彙（牛体・田地）
- III 性向語彙（短気者・誇り大家・仕事に対する態度・期待される人間像）
- IV 親族語彙

評者はたまたま同じ中国地方（山口県）の出身ではあるが、方言学的調査に従事したことはなく、本書に記録された方言語彙自体につ

いて論評する資格を持たない。また、記録された資料も膨大な量であって、その紹介のためのスペースもない。したがってこの書評は評者が多少考察を進めてきた意味論・語彙論の立場から、本書に含まれる理論的な面に焦点を絞ることにしたい。

本書を通読して、中国地方の語彙の具体的な姿を知ることができたのは楽しい経験であった。それも実生活に密着して微視的に調査されているのが有難い。語形にアクセント表記が加えられていて、音声的再現が可能になっているのも有難い。しばしばインフォーマントの説明の言葉がそのまま記録されていて、その方言の全体的な姿が分かるようになっていゝのも有益である。

二、「生活語彙」

本書の題名に含まれる「生活語彙」という名称は、一般の「方言語彙」に代るものと言つてよいが、これは著者が学統を継ぐ藤原与一の着想に端を発する。その思想は「方言語彙はその土地の生活に密着したものであるから」というのであるが、意味論の見地から言うと、この考え方の背後には二つの基本的な思想が含まれていて、それはまた本書の諸研究の基調をなしていると言える。その第一は

語彙の体系を外界の事柄の体系の反映としてとらえるということであり、その第二は、語の意味は使用者の実体験・認識のしかた・価値観・過去の生活などに至るまで広く広がっているとするものである。第一の考えは「モノ体系観」（コトバ体系観に対する）と呼べるものであるが、これは本書（十六ページ）に引用されている藤原与一の最初の説明（昭和37年）にははっきり現われておらず、藤原与一（一九七七年、一二六ページ）に明瞭である。

第二の思想は従来の構造的意味論の考え方に対するものとして提出されており、著者自身が特に強調する点である。著者がとらえている構造的意味論では、示差的意義特徴だけが重視され、語が指示する事物についての人間の情緒的反応や価値感が極端に軽視される。これに対して著者の取る立場は、「構造主義の名のもとに切り捨てられていたものをすべて拾い上げ、一々のことばがいかなる意味のひろがりと深まりとを現実の生活の中で示し、そこに、どのような生活認識の特性や傾向が認められるかを、徹底的に掘り起こそうとする態度である」（八ページ）というのである。著者はこの考え方を「生活意味論」と呼ぶのであるが、これは言うなれば、語のラングの意味とパロルの意味をまとめて扱おうとする立場である。

方言語彙の研究に限らず、一般の意味理論の見地から言つて、語の意味を示差的特徴だけに限ることに問題があることは評者も国広哲弥（一九八二年、三〇ページ）に論じており、さらに同書六七―七八ページでは語の意味に「含蓄的特徴」を加えると述べた。これはさらに「文体的特徴・喚情的特徴・文化的特徴」に下位区分されるが、この中に著者の言う示差的特徴以外の意味の大部分が含まれるはずである。つまり評者としては著者の主張に大筋としては賛成である。

しかしその主張の中に含まれる、一回限り、一個人限りのパロルの意味まで含ませることは問題であると思う。そもそもそれは記述不可能である。やはり最小言語社会の中で多かれ少なかれ一般的である限りにおいて記述するという制約は必要であると思われる。評者は国広哲弥（一九八七）において、語の意味はいわゆる語義の意味に留まらず、百科的知識に繋がっていると述べたが、これも著者の考え方に沿うものであると思われる。評者の考える百科的知識にびたりと当てはまるのが、本書に示された次の「コチ」▲東風▼（広島県豊田郡豊町大長方言）の記述である（二六ページ）。

コチ②2月から6月にかけて吹く。とくに2月と6月が多い。

⑤雨の降ることが多い。とくに、晩春から初夏にかけてよく降る。

⑥日和に吹くと強風。

⑦強風は少なく、波も立たない。

⑧吹き始めるころは海水が冷たい。

⑨漁にとつてよい風、魚がたくさん獲れる。

⑩干潮のとき順風になる。

⑪高いところを吹く場合は、帆を巻いて走る。

著者はさらに「語彙の共時態は、ほぼ、人の一生の時間的な幅を想定しなければならない」（二三ページ）と述べているが、その通りであると思う。この考え方を指して藤原与一（一九七七年、三二―三三ページ）および著者は「高次共時論」と呼ぶが、少なくとも意味論に関しては共時論は常に高次共時論であるべきであり、単なる共時論との区

別の必要は消える。

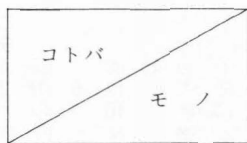
三、モノの体系とコトバの体系

すでに触れたように、語彙の体系に関しては、それをモノの体系の反映としてとらえるモノ体系観と、モノの体系とは別に、コトバの意味関係自体に基づいて体系を考えようとするコトバ体系観とがある。本書第一部第三章第一節「ものの体系かことばの体系か」はこの問題を真正面から論じたものである。三一ページに示された、兵庫県美方郡温泉町方言の牛のアタマについての語彙体系図はあとで触れるようにいくつかの問題点を含んでいるが、根幹部分はモノ体系図である。この第一節は、この体系図に対して柴田武らが「この図は、ものの体系を示す図であって、語彙の体系を表示するとは言いがない」と批判したことから論が始められている。本書全体の趣旨からすると、当然モノ体系観からの反論が展開されるはずであるが、意外なことに、あとにはコトバ体系観を支持する文章が続いている。

すなわち、「ものの体系」は、決して「ことばの体系」に對置せしめられるような対立項でなく、「ことばの体系」を通じてはじめてその構造が明瞭になつてくる、いわば、「ことば」以後の体系であると考えられるのである(三四ページ)

しかしそのあとで、サビア・ウオーフの仮説のような言語決定説の立場に立とうとしているわけではない(三八ページ)。「言語外」の要素からどのような影響を受け、どのように依存しているかを見ることも重要であるとする(三九ページ)。そして「両者を截然と分別することにのみ意を用いるのは、得策ではないように思う。むしろ、意

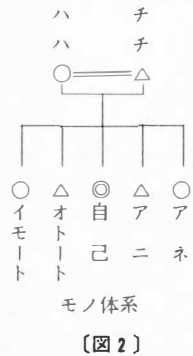
味の体系と生活の現実とを統合する、より柔軟で高次の体系観を確立することが発展的であるように思われる」(三四八ページ)とする。つまり著者はモノ体系とコトバ体系の両方を認めようとする。評者としてはこの考えに賛成したい。この考えを評者なりにまとめ直すならば、方言語彙に限らず一般に語彙体系には、コトバの体系が優勢な部分と、外界のモノ体系への依存が強い部分とが混在していると考えられ、どちらか片方だけの見方で全体を律しようとするのは



〔図1〕

実態に合わないのではないかと思われる。つまり図1のようになっていふと考えられ、我々の課題は、語彙体系のどの部分がこの図のどの辺に位置するかを具体的に明らかにして行くことである。この図は、語彙体系のかなりの部分はモノ体系に依存しながらも、そこにコトバからの体系化が重ねられることを示している。著者が四一三ページで「相互乗入れの関係」と述べているのはこの図のようなことを指しているであろう。

すでに触れた著者の示す牛のアタマの体系図の根幹部分は一般に言われる「部分全体関係」に基づくものであり、部分全体関係は基本的にモノ体系によるものである。モノ体系によると言っても、異なった言語の人体部分名の分割のしかたに見られるように、区分のしかたにずれがある可能性はある。親族名称については、文化人類学的にとらえられる親族組織に合わせたモノ体系的体系(図2)と、名称の成分分析に基づくコトバ体系的分析(図3)の両方があり得る。



〔図2〕

ハ	ハ	チ	チ
ア	ネ	ア	ニ
自		己	
イモート		オトート	

コトバ体系

〔図3〕

柴田武（一九八二年、四七ページ）に指摘されているように、このモノ体系の方はある特定の親族の場合を示しているものであり、この形式では抽象的な体系化は不可能に近い。しかしコトバ体系の方は一般的な関係を示している。このように、ひと口に「モノ体系」と言っても親族体系のような抽象的なもの、色名のように知覚的構造に基づくもの、動物の体の部分名のように具体物の空間的隣接関係に基づくものときまざままであって、一概に論じることができない。評者の考えでは、空間的隣接関係に基づく語彙の場合はモノ体系に即して語彙体系を考えて差し支えない。その具体例として、本書中の牛体語彙を取り上げて、やや詳しく検討してみることとする。

四、牛体語彙の体系

著者が示す牛体語彙は兵庫県美方郡温泉町方言のもので、四六五ページ以下に一章を設けて詳説されているが、その頭の部分だけがさらに三ページに示されているので、それをここに再現してみる（図4）。使用記号のうち「/」は同義関係、「↑↓」は反義関係、「○」は特長、「×」は損徴を表わす。

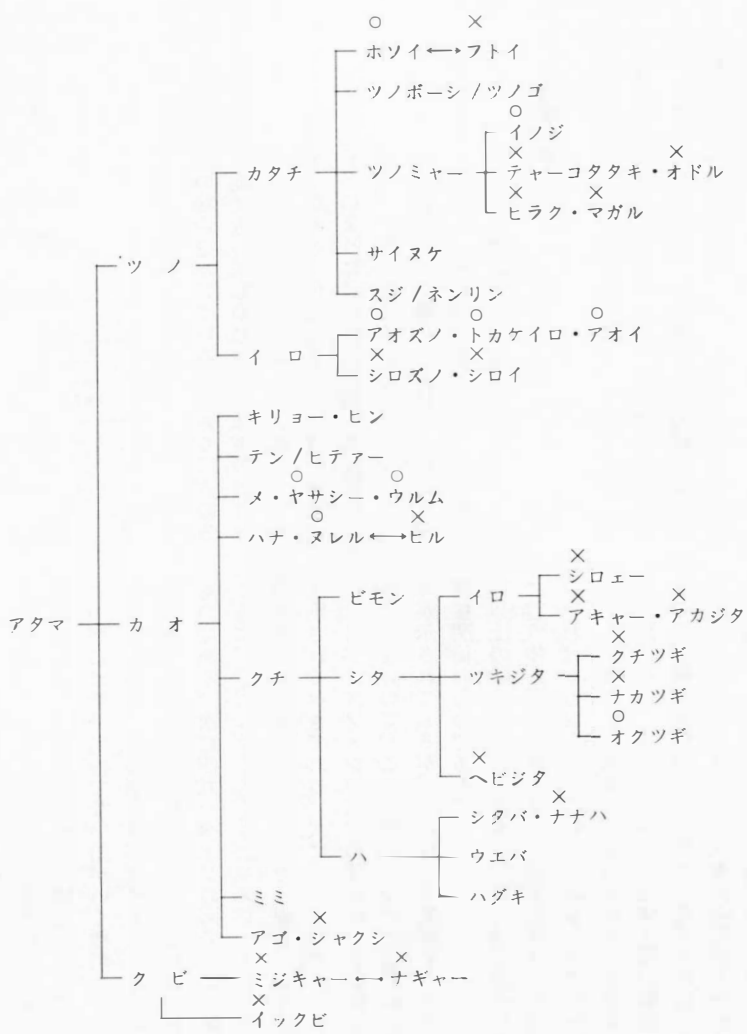
すでに触れたように、この図のアタマに対するツノ・カオ・クビ、カオに対するメ・ハナ・クチ・アゴは全体・部分の関係にあり、モ

ノ体系の図である。もつとも細かいことを言うと、クビはアタマの部分か、ミミはカオに属するのか、この図ではアタマはカオも含むものとなっているが、カオと区別されたアタマはないのか、などが問題となるが、いまはそれは不問に付する。もつと大きな問題は、この図には部分名称でない語がいく種類か区別なしに混入されていることである。その第一は、カタチ・イロ・キリヨー・ヒンという分類基準名である。これは（ ）などの記号を付けて区別すべきものである。次に四九一ページの図で（ ）で囲んで区別されているように、「ホソイ↑↑フトイ」「ヌレル・ヒル」などの部分名称と連語をなす形容詞・動詞はまったく異質の語であるので、しかるべく区別されるべきである。次に、ハに対するシタバ・ウエバ、ツノに対するアオズノ・シロズノの関係は上下関係であって全体・部分関係ではないので、これも表示し分ける必要がある。ハの下位にハグキが示されているが、これは上下関係でも全体・部分関係でもなく、隣接関係のものである。

以上のように、さまざまな性質の語が混在していて、これは普通に言う体系図とは言えない。語彙体系は何が何でも枝分かれ図にしなければならぬというわけではないので、なお工夫が必要であると考えられる。一般には、枝分かれ図が成立するのは上下関係の場合に限られる。また、具体物の全体・部分関係は、具体物の図示によるのが最も適切であると思う。そうすれば、部分と部分の境界も明示することができるし、大きさの関係も分かる。

三八八ページに潮に関する語彙の体系図が示されているが、ここでも同じような混在状態が見られる。

柴田武氏が図4の体系図を批判されたときは、「モノの体系」であ



[図 4]

る点を批判されたのであるが、同時に右に述べたような混在性も批判しておられたことは柴田武（一九八七）に明らかである。評者としては、この混在性を除いて整理し直せば、モノ体系的語彙体系はあり得ると考えるが、柴田武氏はこのような場合も「コトバの体系」を目指すべきであるとされ、柴田武（一九八七）の中で図5のような暫定的な案を示された。柴田氏の御許可を得て転載する。



〔図5〕

柴田武著コトバの体系

ローマ字は対になっていることを表わす。
 片仮名は対になっておらず、いくつもないことを表わす。
 平仮名は対になっておらず、いくつもあることを表わす。
 四角形の大きさは「目立ち度」に対応する。

すでに触れたように、モノ体系とコトバ体系の問題は、あれかこれかという問題ではなく、語彙分野の性質に応じて連続的に変わってきたものであるが、人間の首から上についても、もしコトバ体系に徹するならば似たような体系が得られるであろう。しかしながらそ

れでは「目と鼻の先」、「警視庁は宮城から目と鼻のところだ」で示される「近距離」の意味の説明が難しくなるのではなからうか。これはモノ体系のレベルでの目と鼻の隣接関係に基づくものである。聞いたことを全然理解しなかったり、記憶しなかったりすることを「右の耳から聞いて左（の耳）に抜ける」と言うが、これも両耳と脳の位置関係に基づいていると言えよう。

五、具体的な問題

以上、理論的な議論を終って、具体的な論評に移ることにする。本書の記述中特に興味深かった点を挙げると、まず、人間生活上マイナスの評価を受ける分野において、プラス評価を受ける分野よりも語彙量が多い傾向があるという指摘がある。潮の名については六八ページに、性向語彙に関しては六一〇ページに述べられている。六一八ページ以下では具体的に、働きの者を指す意味項目（語と句を一緒にした呼び名）と怠け者を指す意味項目が比較されていて、連語形式・慣用句を含む全体について見ると、「怠け者」の語彙量が「働きの者」の語彙量の約三倍あり、語形態のみについて見ると「怠け者」の方が四・三倍になるという（六一二〇ページ）。

次に、命名の動機の解説に意が用いられている点が挙げられる。鳥取県の中・東部では潮境のことをギラと言う。現象としては、浜に向かうタテのものと、浜と平行のヨコのものがあるにもかかわらず、名前を与えられているのはタテギラの方だけだということ。これは漁業生活上の有意義性によるのである。また六〇ページ以下では福井県勝山市の雪語彙について、大きく目立ちやすい雪に多くの関心が寄せられていることが述べられている。

国広(一九八二)において、民間分類体系は一般に五段階に留まるというバーリン、ブリードラブラの発見に触れたが、本書の田地呼称(五〇五ページ)がその例証になっているのは興味深い。

第十章から第十二章にわたって魚名が扱われているが、魚名の二次派生語に用いられる色彩名の大部分がクロ・シロ・アカ・アオ・キン・ギンに限られているのが注意される。これは日本語の基本的色名がクロ・シロ・アカ・アオの四語であることの一つの裏付けと見ることが出来る(四五九ページ参照)。

六、若干の注文

以下では細部に関して若干の注文を述べさせていたきたい。第IV部では親族語彙の体系が扱われているが、その全体に関係する問題として、一般の社会言語学で用いられる「呼称」(address term)と「言及称」(reference term)の区別が曖昧になっていることが挙げられる。この術語は柴田武(一九八二)では「呼びかけ語」「言及語」と呼び分られている。本書の他の部分では「呼称」が単に「名称・名前」という意味で用いられているので、さらに曖昧度が増している。社会言語学で用いる「呼称」は、本人に直接呼びかけるときに用いる語であり、「言及称」は第三者と話しているときに間接的に言及するための語である。著者はこの一般の区別を採用しないという(六五〇ページ)。その理由は、この区別が必ずしも厳密に認められないから、というのであるが、それは概念と実際の用法の混同ということになるだろう。やはり両概念を区別した上で、例えば「オトサンは呼称にも言及称にも用いられるが、チチは言及称にしか用いられない」というふうに記述するのがよいと思われる。本書ではそ

の区別が明確でないために、例えば六六〇ページの「おじ・おばの呼称」の項では、紹介のときに用いられる語形が含まれており、これは言及称だと分かるが、それ以外に言及称があるのかないのか、はつきりしない。同じページに「同一集落内の他人同士における親族呼称」という表現が見えるが、これは一般用法に従えば矛盾した言い方になる。これは親族呼称ないし言及称の親族外拡張用法などと呼んで区別すべきであろう。

参照文献は「注」として各章で別々に言及されているが、その中には何度も繰り返して現われるものがある。これは恐らく元の論文のままに再録されたためと考えられるが、一本にまとめられるに当たっては、巻末にまとめて示していただきたいかった。その方が参照に便利であるし、スペースの節約にもなる。Burling (1970) は時々書名が間違つて引用されている。

巻末に本書を構成する既発表論文のリストが掲げられているが、各論文には発表年を付けていただきたかった。読んでいて、時おり執筆の年代的前後関係を知りたいと感じたことがあつたからである。

以上、遠慮のない注文を並べさせていただいたが、今後の著者のお仕事に多少でも足しになればと考えたためである。

いま拙評を書き終えて全体をふり返つてみると、本文六六〇ページに及ぶ大著のほんの一部にしか触れていないことに気付く。触れるべくして触れ得なかつた注目すべき記述は多数にのぼる。スペースの制約のため割愛せざるを得なかつたことをお断りし、お詫び申し上げます。

(昭和六十二年二月十日発行 和泉書院刊 A5判 七〇〇頁)

一八〇〇〇円)

〔付記〕

評者からの問い合わせに対して懇切なご教示をいただいた著者室山敏昭氏および柴田武氏に厚く御礼申し上げます。

〔参考文献〕

藤原与一 (一九七七) 『方言学の方法』大修館書店。

(一九八三) 『方言学原論』三省堂。

国広哲弥 (一九八二) 『意味論の方法』大修館書店。

(一九八七) 『意味研究の課題』、『日本語学』七月号、明治書院。

室山敏昭 (一九八〇) 『地方人の発想法——くらしと方言——』文化評論出版。

(一九八六) 『語彙の社会言語学的研究』、『日本語学』一二月号、

明治書院。

柴田 武 (一九七二) 『語彙研究の方法と琉球宮古語彙』、『国語学』87集。

(一九七八) 『語彙研究と方言語彙』、柴田武・日本方言研究会共

編『日本方言の語彙——親族名称・その他——』三省堂。

(一九八二) 『現代語の語彙体系』、『講座日本語の語彙』第7巻 現

代の語彙』明治書院。

(一九八七) 評者への昭和62年9月4日付私信。

—— 東京大学教授 ——

(昭和六十二年十一月四日 受理)